

序 章

橋本 明

編者の金森修氏に代わって、私がこの章を書くことになった。その経緯は「あとがき」で述べることにして、本来であればここで「明治・大正期の科学思想史」の概説を記すべきなのかもしれない。だが、そもそも私は「科学思想史」が何であるかを知らない。なるほど、これまで医学やその関連領域の歴史的な研究には携わってはきたが、「科学」全体について考えたことはないし、その「思想」の歴史は自分の守備領域から大きく逸脱している。私の困惑は、私の研究の「芸風」を知る人からは納得してもらえらるだろう。であるので、「科学思想史」が何であるかについては、『昭和前期の科学思想史』（金森修編著：2011）に収められた金森氏の序章「科学思想史」の来歴と肖像」を参照していただければ幸いである。同書の記述の中心は昭和期だが、わが国の科学思想史を概観することができる。

本書は、『昭和前期の科学思想史』（金森修編著：2011）および『昭和後期の科学思想史』（金森修編著：2016）につづくものである。時代とともに科学的な知識が増大し普及していっただろうことを考えれば、昭和期を前期と後期にわけた二冊本、明治・大正期が一冊本にまとめられたのは妥当だろう。けれども、明治・大正期には、昭和（前＋後）期と同じく、約六〇年という時間が流れていた。金森氏は、科学思想史は「伝統的にマルクス主義との強い繋がりの中で構築されてきた」のであって、「昭和初期頃を起点とするというのが原則だ」（金森：2011, p.11）と述べている。とすれば、科学思想史の構築という点では未成熟だった、この還暦的といふべき歳月のなかで醸成された明治・

大正期の科学をめぐる言説の特徴とは何だったのだろうか。その答えは、本書の各章を読み比べることで自ずと浮き彫りにされるはずである。とはいえ、序章の役割は書物全体の道案内をすることだろう。そこで、以下ではまず本書の構成を確認し、各章に通底していると思われる視角あるいはモチーフを概観し、さらに各章の内容を簡単に紹介していきたい。

本書は（序章をのぞく）八つの章から構成されている。これらの章は大きく二つのタイプに分けられるかもしれない。ひとつは、おもに一人の人物に焦点を当てて、その学問／科学に関わる思想を検討するものである。具体的には、福澤諭吉（第一章）、山川健次郎（第二章）、横井時敬（第三章）、三宅雪嶺（第五章）となる。もうひとつは、特定の学問分野の形成・展開・評価を人物や社会事象に絡めて述べるもので、地理的知（第四章）、精神病学（第六章）、天変地異（第七章）、千里眼事件（第八章）である。さらに、人物の肩書きや記述の内容から、それぞれの章にあえてひとつの学問分野（とはいえないものもあるが）を割り当てるとすれば、窮理学（第一章）、物理学（第二章）、農学（第三章）、地理学（第四章）、宇宙論（第五章）、精神医学（第六章）、地震学（第七章）、心理学（第八章）などとなるだろう。だが、そもそも明治・大正期は学問的な制度が整う途上の、いわば不安定な時代だとすれば、今日的な学問分野を割り当てること自体にあまり意味がない。また、一般的には「○○学者」「△△の専門家」などと認識されているも、本書ではむしろその専門領域からは外れた部分に議論が広がっているようにも見える。

さて、以上が章の構成に関わることであるが、全体に通底していると思われる視角あるいはモチーフは、どのように抽出されるのだろうか。八つの章という限られた内容からの抽出ではあるが、それは明治・大正期という時代の科学をめぐる言説のアウトラインを示しているに違いない。そこで三つのキーワードを考えた。もちろん、これらのキーワードは多かれ少なかれすべての章にあてはまるものだが、とくに関連が深い章に触れて、ごく短いコメントを述

べたい。一つ目のキーワードは、啓蒙とメディアである。科学知識の伝達と普及は富国強兵と国民国家形成に欠かすことができないものであり、いわゆる啓蒙家と大衆的なメディアが科学知識の伝達と普及に果たす役割はきわめて大きかったと考えられる。第一章が明治初年における福澤諭吉の啓蒙戦略とメディアをめぐる軌轢に焦点を当てている一方、第七章は関東大震災前後の時流をたぐみにとらえて科学啓蒙に結びつけていく、アカデミズムやメディアのふるまいを論じる。二つ目のキーワードは、インサイダー／アウトサイダーである。明治初年の啓蒙の時代を経て、帝国大学をはじめとする高等教育機関の整備が進むと、大学アカデミズムが形成されていく。欧米を範とする学問体系を堅持するのが大学アカデミズムの正統インサイダーならば、そこから外れたものは異端アウトサイダーとなる。だが、欧米にあるいは正統に接近すればするほど、逆に日本の伝統や東洋（という異端）へと向かう力も高まり、オリジナリティを追究するという正統な焦燥感が異端的思考へのハードルを低くする。やや乱暴なくくり方だが、第二章の山川健次郎の日本回帰、第三章の横井時敬の統合的な農学、第六章の身体主義的な精神病学と「もうひとつの」精神病学、第八章の千里眼事件をめぐる心理学の正統と異端、のすべての深層にインサイダーとアウトサイダーとの間の葛藤を見いだすことが可能だろう。三つ目のキーワードは「境界」である。明治・大正期におけるわが国の対外政策は、欧米列強諸国との協調と対立の狭間にあり、日本国土の境界を確定する作業に腐心するものだったともいえよう。第四章の地理的知はこの時代の要請にこたえて生み出されてきたものだが、その境界を「宇宙」にまで広げ、境界自体を無化していく第五章の三宅雪嶺の生命論言説は特異なものだった。それでは、以下で各章の内容を簡単に紹介していきたい。

第一章は、啓蒙思想家としての福澤諭吉を中心に論じている。概して、明六社に代表される明治の啓蒙思想家たちは、「伝統的な政府中心主義思想」を持っており、日本の「人民」を社会や国家を構成する能動的な主体としての

「国民（ネーション）」へと育てていこうという意識に欠けていた。これに対して福澤は、「封建的な身分制度（門閥制度）」から解放された「人民」は、「社会―市場」での活動に相応しい主体として再編成される必要があると考えていた。その再編成された主体である「国民（ネーション）」とは、市民であり、国民であり、人的資本でもあるという三重の側面を持つ存在である。福澤が推奨した「学問」、すなわち「実学」とは、こうした「国民（ネーション）」を育成するためのものであり、各人の市場価値を高める手段であった。さらに、「国民（ネーション）」に相応しい「学問」として、「物理学を中核とする自然諸科学の知識体系」を学ぶ「究（窮）理学」が基底とされた。福澤の「究（窮）理学」推奨の一環として『訓蒙窮理図解』の発刊があり、この科学啓蒙書が、封建制度下では一部の知識人たちが独占していた近代科学の知を、世俗化＝平等化した役割は大きかったという。

だが、啓蒙活動自体が、啓蒙的言説に対して「絶えず異議申し立ての『多事争論』を持ち込む他者」をも内包していた。知識人階級に独占されてきた知を広く解放するために、福澤があえて「俗文」によって啓蒙書を刊行する過程で、それらのパロディとして登場する「戯作」が、シリアスな「窮理」の態度を「河童の屁」ほどの「軽々しさ」とかがわしさ」にまで引きずり落とす。啓蒙的言説は、誤読され、歪曲され、徹底的に「俗」化され、本来の意義はなおざりにされたまま流布していく。こうした「戯作」的な「俗」に対して苛立つ福澤ではあるが、それは彼自身が進める啓蒙によって生み出された「智」の「蛆虫」たち、あるいは「貧にして智ある者」によってもたらされた当然の帰結ともいえる。しかも、その苛立ちの正体とは「啓蒙家が、自身の推進した啓蒙の産物をそうと自覚せずに嫌悪」するという「無意識の症候」なのである。

第二章は、日本人として最初に物理学教授となり（一八七九年）、東京、九州、京都の各帝国大学の総長を歴任するなど教育者としても知られる山川健次郎を扱っている。山川は官費留学生として一八七一年に渡米し、諸学問の基礎

として物理学を学ぶ方針をたてた。進学先のイエール大学シェフィールド科学学校では土木工学を専攻し、その基礎として物理学を学んだ。この米国留学は山川の国家意識を高めることになる。最晩年の山川は、富国強兵という国家的な目的のために数理科学を基礎とする物理学―生物学―社会学という階層的な学問観に従って物理学を選択した、とやや後付け的に回想している。

山川は一九〇一年に東京帝国大学総長に就任すると、独自の教育論・国家論を展開していく。日露戦争の時期には、「西洋科学を補うための日本の誇る文武両道の精神論」と評価されていた武士道を論じるようになった。日露戦争後から大正期にかけて、山川は当時の世界的な傾向であった徳育教育へ関心を寄せながら、列強諸国に対する日本の劣等性を補強するための精神的な武器として愛国心を重視した。さらに、科学技術の進展とともに国家間の生存競争が激化していくや、富国とともに強兵がより明確に意識されるようになる。第一次世界大戦中の山川の演説では「正義人道に従って正当な自衛のために軍備を充実させる」という尚武主義に力点が置かれた。

以上の記述からは、山川の物理学者としての活動に疑問符が付くかもしれない。だが、本質においては、物理学の学問的姿勢に通じる合理性に貫かれていたようである。たとえば、「千里眼問題」（一九一〇年）には客観的・中立的な「白紙の態度」で臨んだ。また、山川は「富国強兵の基礎は科学に在る」と確信していたが、基礎研究を重視するという学問の自律的な姿勢こそが重要であり、物理学などの研究テーマが、産業、ひいては富国強兵と個別具体的に関連づけられている必要はないと考えていた。一九一七年の理化学研究所の設立にあたっては、産業に資するという同研究所の目的に同意しつつも、あくまで学理の探求を優先すべきことを主張したという。

第三章は、「農界の巨星」と称され、東京農業大学の創始者である横井時敬の農学を論じている。明治・大正期の農学界で絶大な存在感があった横井は、東京帝国大学教授として農業経済学を講ずる身でありながら、その学問体系

は「八方破れ」「素人臭くスキが多い」など、アカデミズムとの距離感が大きい人物と評される。

横井の評価軸は、「農学榮えて農業亡ぶ」という自身の警句が示すように、現場にとつて役に立つか立たないか、といった徹底したプラグマティズムである。農民との交流を経て考案された、比重の重い種籾を選別する「塩水撰種法」は「横井の顔」ともいふべき方法といえる。だが、横井の「田植え歌廃止論」からは、労働の徹底した効率化と管理論への志向性がうかがわれ、彼自身が批判していた「農業の工業化」に通じるという方法的な欠陥が露呈している。他方、横井の主張する農本主義は、貧農の救済、小作人の地位向上、大地主の保護、のいずれでもない。その基調は「軍国主義と地主小作協調」であり、それを包摂するのが「邑」だった。また、横井の論点には、農民の土地所有欲を軽視した社会主義革命への批判、また、土地を値段で評価するだけの資本主義への不満があるのだが、その根柢に「愛着心」という農民の心理や、地主と小作人との間の「友情」というおよそ農業経済学には馴染まない言葉が使われるなど、学問としての危うさがぬぐえない。横井の『合関率』（一九一七年）は、分解的方法が発展しすぎた農学の統合を目指したものの、「試みは壮大だが、分析になっていない」書物であり、「高遠なる目的」を目指すかゆえに、経済問題を道徳問題に落とし込んでいる。

このように、横井は多角的な農学を総合するための重石として、「軍国主義、近代労働の賞揚、そして、その二つを結びつける、支配者感覚に染まった根性論かつ道徳主義」を持ち出し、彼がもともと意図していた「現場感覚に根ざした農学を作り損なった」ことに限界があったと評される。

第四章は、朝鮮半島の地誌や旅行記を手がかりに、明治・大正期の地理的知について述べている。この時期は地理学が制度化される以前にあたり、アカデミックな地理学を意識して朝鮮に関心を向けたものの、帝国大学が主導する地理学とは結びつかなかった矢津昌永と田淵友彦に焦点が当てられている。

そもそも、朝鮮に関わる地理的知の生産は、その実用性ゆえに「需要の高下に正直なまでに敏感であり、政治状況を後追いで供給された面が強い」という。明治初年に作られた地図や地誌的書物は近世の資料や欧米の資料に頼っていたが、日清戦争で喚起された地理への突発的な需要は、近世的な朝鮮地誌をなぞることから離れて、日本人の関心や視点から「ナマ」で朝鮮を体験した旅行記を多数生み出した。日露戦争の前後にはふたたび刊行物のうねりもたらされ、実業家や拓殖希望者に地理的な事柄を含む具体的・実用的な概観が示された一方で、伝統的な地誌とは異なるアカデミックな地理学を意識した矢津の『韓国地理』（一九〇四年）および田淵の『韓国新地理』（一九〇五年）が発刊された。

矢津は、帝国大学が地理学を主導する前に、地理学者として活躍した人物である。彼の『韓国地理』は近代地理学の自然地理・人文地理・地誌という三区分を意識した最初の朝鮮地誌である。一方、田淵は東京帝大史学科卒業後に私塾舎監や中学校教員を務めた。彼の『韓国新地理』は、上記の三区分構成を明示した最初の朝鮮地誌となった。これらの書物で展開されている「地理的植民地論」は、陸地の形状や自然環境の条件から、植民地としての朝鮮半島を評価しながら、そのポテンシャルを活かしきれいていない人々として朝鮮人を論難する面を持ち、日本による植民地化を正当化するものだった。

第五章は、三宅雪嶺の『宇宙』（一九〇九年）を主たる対象として、彼の思想のなから自然科学に関する成分を抽出し、その含意することを吟味している。ナシヨナリズムの思想家として知られる雪嶺の思想傾向は、単なる守旧的・復古的思想とも国家主義とも一線を画する、コスモポリタンな性格をもち、日本固有の真善美を見、日本の主体性を確立することで世界へと通じるという普遍主義だった。だが、太平洋戦争が始まると、「中庸を行った古き良きナシヨナリスト」雪嶺の姿は、「幾分の曇り」を帯びていったという。

雪嶺の『宇宙』は、彼の著作全体のなかでも、当時の思想状況のなかでも、独特な位置を占める。その基調にあるものは、宇宙が生きているという（宇宙有機体論）、地球の人類に特権的地位を与えない（人間中心主義批判）、あるいは、生命現象を特権視せず自然現象の一部とみなす（生命中心主義批判）といったものであり、その認識論的な立場は、絶対的な真善美のようなものを認めず、時間の経過とともに、より真なるもの、より善なるもの、より美なるものへと漸近する（近似的認識）というべきものだった。確かに、全体論と有機体論の傾向を強く持つ『宇宙』は、東洋的なアニミズム的自然観を連想させるものの、その時代の科学知識を挙げて動員し具体的に宇宙を論じた思想書は日本の思想界にはほとんど存在しなかった。その意味で、『宇宙』は雪嶺の獨創性が生み出した、日本近代で空前絶後の宇宙主義コスミズムの書であった。雪嶺にとつては、〈国粹〉と〈宇宙〉はいささかも矛盾せず、彼は日本や世界のみならず、宇宙を考える特異なナシヨナリストコスミストだったといえよう。

第六章は、明治・大正期における精神病治療思想の系譜をたどるものである。近代日本の精神病学フシヒアトリーは、その黎明における各地の病院の設立・閉鎖や混沌とした医学校の盛衰を経て、欧米諸国とりわけドイツの精神医学体系を受容しながら、帝国大学というわが国特有の研究教育機構のなかで学術的基盤を固めていった。当時のドイツの精神医学界では、ロマン主義的な自然哲学の影響も衰退し、「精神病は脳の病気である」という身体主義が台頭する一方、経験主義に貫かれた臨床的疾分疾分類学も発展をとげていた。帝国大学を頂点とする日本の精神病学の研究および教育は、その流れのなかに位置づけられる。

だが、精神病学のもうひとつの側面である精神病患者の治療・処遇論の進展は、はかばかしくなかった。精神的療法への強い関心がその発端にある日本精神医学会の発足や森田療法の開発——いわば「もうひとつの精神病学」——は、研究中心主義、身体主義的な精神病学へのアンチテーゼでもあった。他方、精神病患者の処遇に決定的な影響を与える

法制度や精神病患者を監置・収容・治療する「治療の場所」に関わる議論も、精神病治療思想の系譜の一端を成している。とりわけ、精神病患者監護法（一九〇〇年）と精神病院法（一九一九年）は、明治・大正期における精神病患者の監置と医療をめぐる処遇理念を強く反映していた。また、医療施設の設置に関わる設計・建築の際に巻き起こった議論や、医療施設ではない宗教的施設などでの患者の治療・看護のあり様は、近代日本の精神病治療思想の特徴を考えるうえで重要な素材を提供している。

第七章は、明治・大正期の地震学者や科学啓蒙者の言説を中心にして、天変地異をめぐる科学思想について論じている。関東大震災後に登場する「天譴論」をどう捉えるか、さらには、天変地異という不確実な現象をめぐる科学知識の「啓蒙」がどのように可能なのか、という本章のメインテーマに迫る前段として、わが国のアカデミックな地震学を主導した東京帝国大学教授・大森房吉と同助教授・今村明恒との対立に言及する。『太陽』に掲載した論文（一九〇五年）が、人々の地震への危機意識を煽っていると大森に批判された今村は、しばらく不遇な身に置かれることになる。

しかし、関東大震災の発生が状況を大きく変える。渋沢栄一らが唱えた、この地震が政界、経済界、風紀の乱れに対する罰であるという「天譴論」が人々に支持される一方、大正デモクラシーによって社会における存在意義を低下させていた軍部は、大震災時の動乱を収める役割を担うことでその存在意義を示すことに成功し、文部省はこの機会を利用して国民道徳教育への取り組みを強化した。地震学界も変化していく。一九二三年に他界した大森にかわって今村が指導的立場になった。今村は、過去に世間の誤解を生んだ反省から、地震と震災、予測と予言などを区別することの重要性を述べ、地震は対策をすれば恐れるべきものではないと説いた。他方、関東大震災は『科学知識』『科学画報』に代表される科学雑誌出版ブームの只中に起こった。これらメディアを通して、大震災を科学の重要性を訴

える好機と捉える科学啓蒙家たちの論述は、地震そのものが天譴であるというより、地震に伴う災害が、それに対する備えをしなかった人々への罰であるという「天譴論的言説」でもあった。

第八章は、御船千鶴子らがもつと称された千里眼（透視）能力をめぐる、東京帝国大学の心理学者・福来友吉らによる公開実験などで新聞メディアを騒がせた、いわゆる千里眼事件を扱う。京都帝国大学の精神病学者・今村新吉は、福来との共同実験をまとめた「透視に就て」において、心理学や精神病学では行き届かない、厳密な科学的実験にもとづく認識枠組みを主張した。だが、「柔軟な発想で不可思議な精神現象に切り込む理想的な科学者」と称揚される福来は、透視を「五感を基とした心理学で説明することは全然不可能だ」とし、今村の示した科学的アプローチから逸脱してしまう。千鶴子の東京での公開実験は専門家の関心を惹くことはできず、東京帝国大学の合同チーム結成は幻に終わる。

他方、四国丸亀の新たな「能力者」長尾郁子についても、福来と今村による共同実験が行われたが、背後には京大の巨大な学際型総合研究プロジェクトが見え隠れする。学長の命により丸亀を訪れたとされる同大学哲学科の学生・三浦恒助は、郁子の人体から発せられる放射線（「京大光線」と命名）を発見したという。同じ頃、福来も郁子の「精神線」を発見したと発表。だが、やがて「京大光線」問題は三浦個人の見解のなかに収斂され、京大という組織的な関与の影は跡形もなく消滅した。今村もほぼ無傷で懲罰などを免れたが、福来は千里眼事件で世間を騒がせたかどで、大学当局から注意喚起をされる身となる。いずれにせよ、千鶴子の自殺、郁子の病死を経て、事態は沈静化していった。

こうした千里眼ブームの背景には、急速に進行する科学教育と唯物論的な世界認識に疑問を抱く人々との落差、西欧の心霊学が流入することでにわかに活気づいた精神主義の主張があった。また、日露戦争以後、急速に発展した新

聞メディアが三面記事を読者獲得の武器とし、千里眼事件は新聞メディアによって膨張し、物語化した側面を持つ。

以上が各章の概要である。全体を通読すれば、明治・大正期の科学的言説が現代日本の状況に驚くほど符合する側面を見いだすことができよう。たとえば、第二章の山川健次郎の教育論・国家論からは、昨今におけるわが国の防衛と安全保障の問題を想起せずにはいられないし、第七章の天変地異をめぐる科学言説は、東日本大震災以降に巻き起こった議論と重なって見える。一見して社会の役に立ちそうもない科学思想史にも、現代の諸問題に対応する「有用性」があるということだろうか。

だが、こうした浅はかな希望的観測を、金森氏なら批判するだろう。氏は『昭和前期の科学思想史』において、「〔現代性への参加〕というような響きのよい言葉に陶然として、もし科学史家・科学思想史家たちが、本来複層的な問題機制を構築すべき自らの役割を忘却し、より単純化された図式でしか自己理解をしえなくなるとすれば、それこそまさに〈衰退〉ではないだろうか」（金森：2011, p. 85）と述べているからである。科学思想史家としての矜持ともとれるこの発言の一方で、金森氏は「科学思想史という切り口自体が現代社会のあり方とはそぐわないものになりつつあるのではないか。私にはそう思えてならない。科学思想史は、一度として完全開花を迎えることもないままに、いつしか古色蒼然としたものに成り下がる。それが、既定路線のような気さえする」（金森：2016, p. 509）とネガティブな気持ちを抱えている。

けれども、「座して死を待つ」だけが、科学思想史のあり様ではないだろう。金森氏は別のところで、「我が国の知識界からフェイド・アウトしていく」のを避けるために、「科学思想史もそれなりの刷新とネットワーク形成を目標とすべきときがきている」（金森：2011, p. 86）とも述べている。そのネットにかかったのが、「科学思想史」が何であるかを知らないと冒頭で述べた、当の私なのである。その意味で、本書『明治・大正期の科学思想史』は「刷新とネッ

トワーク形成」のひとつの成果である。ただし、果たして金森氏の目論見どおりの書物になっているのかどうか、私には判断する資格もない。氏が『昭和前期の科学思想史』に書いた一〇〇頁あまりの「長い序章」に比べれば、とても「短い序章」をここで終えたいと思う。

文献

- 金森修編著 (2011) 『昭和前期の科学思想史』 勁草書房
金森修編著 (2016) 『昭和後期の科学思想史』 勁草書房

あとがき

橋本 明

本書の序章で予告したように、この序章（と、この「あとがき」）を私が書くことになった経緯を説明しなければならぬ。編者の金森修氏から私に原稿依頼のメールが来たのは、二〇一四年一月だった。その時まで、金森氏とは全く面識はなかったし、原稿依頼の「背後関係」がわからなかったのだから、お引き受けすることにした。ただ、時々送られてくるメールから読みとれる、発刊期日を急いでいる様子が気になっていた。それが死期を悟っていた金森氏の隠されたメッセージだったと知るのは、ずいぶん時間が経ってからである。二〇一六年一月三〇日には、氏から執筆者全員に「ひよっとすると、一回もお会いできずに、ということもありえます」というメールが送信されている。それが現実のことになってしまった。二〇一六年五月末、金森氏逝去の数日後に、勁草書房編集部の中本晶子氏から私にメールが来た。金森氏の「遺言」で、私に編者の代わりになってもらいたいというのである。この依頼も唐突に思われたが、「遺言」ならば引き受けるほかあるまい。それから、さらに一年以上が経過して、「あとがき」を書いているこの瞬間にも、金森氏の容貌も、声や話し方も、つまり身体に関わることはなにも知らなのまままだ。ネットで検索すれば、それなりの情報も集められようが、どうしてもそれができない。残されたメールの行間から、私なりに空想する「いつか会うかもしれない金森氏」のままであってほしい、という身勝手な感傷に浸っているからだろうか。

と、ここまで綴ってきたものの、序章を担当することになった経緯の核心部分は相変わらず語られていない。それを了解したのは、比較的最近の二〇一七年四月、勁草書房の会議室で開かれた最初で最後の執筆者同士による原稿検討会の時であった。私がそこではじめて知ったのは、本書の第五章を執筆されている奥村大介氏が、本書の成り立ちや執筆者の人選に深く関わっておられるということである。奥村氏とは某学会を通じてわずかながら接点があった。私に送られた唐突とも思えないいくつかの依頼メールは、いわば舞台裏で本書の完成にむけて尽力されていた奥村氏の周到なプランの一環だったということだろう。このあたりの事情も含めて、金森氏の研究姿勢や科学思想史に寄せる思いについては、奥村氏による本書の「附記」で詳細に述べられている。読者の方々には是非読んでいただきたい。

そもそも私は、金森氏だけではなく、本書の執筆者の大半の方々とも面識がなかった。だが、短期間ではあったものの『明治・大正期の科学思想史』という共通の課題に取り組んできて、いまは旧知の友のような気がしている。また、勁草書房の橋本晶子氏にはとてもお世話になった。編集の過程で何度もメールを交換しながら、適切なアドバイスをいただき、本書の完成に無事たどり着くことができた。そして最後に、科学思想史という視点から私自身の研究を捉えなおす機会を与えてくださった金森氏に改めてお礼を申し上げて、「あとがき」を結びたい。

附記

奥村大介

本書『明治・大正期の科学思想史』は金森修の編著としてこれまで勁草書房から刊行された『科学思想史』（二〇一〇年）、『昭和前期の科学思想史』（二〇一一年）、『昭和後期の科学思想史』（二〇一六年）とシリーズをなし、このシリーズの最終巻となる（本書を含む四冊を〈勁草・科学思想史〉シリーズと呼ぶことにしよう）。以下では、本書とシリーズ全体、さらには金森の編著全体との関わりや成立経緯、そして本書の基本的スタンスについて補足し、本書のために金森が執筆するはずであった論攷についても一言する（金森は私にとって師であり、先生とお呼びしたい気持ちがあるが、論集のなかで執筆者が編者に敬称をつけることは通例でない。以下、すべての人名の敬称を略する）。

成立経緯——金森の共同研究と編著論集

一九八〇年代の後半にフランス科学認識論関係の膨大な翻訳を手掛け、その後一九九〇年代初頭から旺盛な書き手として数多くの論攷・著書を世に問うてきた金森は、二〇〇〇年代初頭まで〈一匹狼〉を自任し、自らを〈リベラルな個人主義者〉と称しており、基本的には単独で研究を進め、単著の書き手であり続けた。金森には共著や分担執筆の作品も数多くあったが、論集の編者になる仕事は、行なわなかった。共同研究の中心となることも少数・小規模にとどまった。その金森に心境の変化があったのが二〇〇四年頃のことである。金森は当時二〇代や三〇代を中心とす

る若手の研究者に声をかけ、フランス系の科学論の共同研究を呼びかけた。それは「フランス科学文化論研究会」という集まりになり、二〇〇五年には文部科学省科学研究費補助基金盤研究(B)(2)「フランス科学文化論の歴史的展開及び現代的意義に関する思想的・哲学的包括的研究」(課題番号1732003)の研究代表・香川知昂が採択された。そして、その後四年間にわたる共同研究の成果は『エピステモロジーの現在』(慶應義塾大学出版会、二〇〇八年)に結実した。これは金森が組織した大規模な共同研究として事実上初めてのものであり、この論集が金森にとって初の単編著となった。その後、金森は同様の手法で共同研究をオーガナイズし、勁草・科学思想史シリーズのほか、『合理性の考古学——フランスの科学思想史』(東京大学出版会、二〇一二年)、『エピステモロジー——20世紀のフランス科学思想史』(慶應義塾大学出版会、二〇一三年)という編著群を作った。いずれの編著論集にあっても、まず前提となる研究会が開催された。年に数回、金森の職場であった東京大学教育学部の大会議室、あるいはその他の大学や学士会館が会場となることもあったが、大きな部屋をとって基本的には論集の執筆者全員、ときに何名かのオブザーヴァーも参加して、朝から夕方まで議論する。論集の各章にあたる内容を執筆者が発表し、それを参加者全員で討論して、挙げられた意見を執筆者は持ち帰り、自身の原稿を加筆・修正する。これを数回経て、完成稿に到達する。だから、金森の編んだ論集は、一つの章は、編者のみならず、残りの章の執筆者全員の目を経た上で改稿されており、結果、どの論集のいずれの章も、質の高い査読を経て学術誌に掲載される論文と同じかそれ以上のクオリティを有していた(こうした研究会は、昼間は長時間にわたって、ときに手厳しい意見も飛び交うシヴィアな討議の場であったが、夕刻からは必ず懇親の席が設けられ、酒を愛し、知的な仲間との酒場での歓談を愛した金森がそれを研究会そのものと同じほどに楽しみにしていたことを書き添えよう)。

しかし、このような全執筆者参加の研究会による原稿の検討という方法を本書はとっていない。二〇一四年の夏、金森の病気が発覚した。実はこの時点で重病であることは判明していたのだが、その事実は限られた関係者のみが知

るところであり、金森は研究・教育の仕事を続けながらの療養生活に入った。金森が本書の構想を練り始めたのは二〇一四年一二月頃のことである。私は本郷の研究室で、一二月八日に金森からこの構想を聞かされた。翌日から二週間ほどのうちに、金森と私の間で、扱うテーマや人選についてのやりとりが電子メールで十数往復している。この時期、金森はすでに病気の治療を受けていたが、まだそこまで切迫した状況ではなく、金森は論集のための研究会を開くことも念頭に置いていた。そして降誕祭の日に執筆者の陣容が確定。二〇一五年一月一二日に執筆者全員に本書の「趣意書」が金森からメール送信され、二〇一六年一二月を期日として、各人約一〇〇枚（四〇〇字原稿用紙換算）の原稿を用意するようという指示がなされた。執筆者は約二年間のあいだに原稿を完成させることになったわけである。だが、この二年の月日を、金森は生きることが叶わなかった。懸命の治療／闘病が続けられたが、徐々に病状が悪化し、原稿検討のための研究会を開催することはついにできなかった。そして、二〇一六年五月二六日に金森は永眠する。それに先立つ五月一日、すでに病気の症状と治療の副作用とで苦痛は極限に達していたにもかかわらず、本書をシリーズ前三作と比べてもいささかも遜色のない論集たらしめようという編者としての強い使命感を抱き続けた金森は、執筆者全員に向けてメールを送り、実質的な編者を橋本明が引き継ぐこと、ただし編者名は企画・人選を行った金森のままとすることなどを伝えた。そのメールの末尾には、残された時間が少ないことを悟っていた金森が書きつけた「私の〈魂〉が、書店でこの本を探し回る様子がいまから想像できます」という悲痛な一文がある。

このような経緯で成立した本書は、各原稿を金森と執筆者全員が検討する場を経ていないのみならず、金森自身が編者として目を通すことのできた完成原稿は一本もなかった。だが、金森は辛い療養のさなかにも、執筆者からのメールに常に応答し、執筆途中の原稿の方向性についての相談に丁寧にあたえ、編者としての助言を与えている。そして、金森の逝去した後、原稿が出そろった段階ですべての原稿データが全執筆者により共有され、自身の分担した章以外もすべての原稿に目を通すという作業が各執筆者によって行なわれた。その上で、担当編集者・橋本晶子の呼び

かけにより、二〇一七年四月某日、国内各地に在住する執筆者全員が勁草書房の会議室に結集した（海外に在住していた執筆者は電子会議システムにより参加した）。諸般の事情から日程直前の呼びかけとなり、年度初頭の繁忙期であったにもかかわらず、首都圏以外に在住する執筆者も含めて全員が参加したことは、金森の遺志にこたえ、この論集をシリーズ前三冊と並べても決して見劣りのしない完成度に高めたいと願えばこそであったはずだ。ここでは、実質的な後継編者となった橋本明が中心となり、出たばかりの初校をもとに、各執筆者は自分の担当章についてプレゼンテーションを行ない、全参加者がそれに対して意見を出すという作業が、朝から夕刻まで、ほぼ不休で行なわれた。ここでは、かつて金森が東大の会議室で開催したときと同様に、無数の意見が飛び交い、それは各執筆者の原稿を確実にブラッシュアップしたはずである。金森が企画した本書の制作は、主の亡き後、このように進められた。その過程の最後まで金森が立ちあうことは叶わなかったが、金森が構想し、人選を行ない、企画の趣意書を起草して、すべての章の統一書式を作成し、執筆の基本的スタンスを執筆者全員で共有することを求め、病氣加療中もつねにメールでのフォローアップを途絶えさせることなく、それは死の二五日前まで続けられた。そして、金森がこれまでの編著でとった編集／制作のスタイルを、金森亡き後、後継編者・編集者・執筆者全員が引き継いだ。金森自身の文章が一切収録されていないにもかかわらず、本書が金森修の編著として真正正銘のものである所以である。

基本スタンス

本書には、金森による序論・あとがきが附され、金森自身の論放も収録される予定であった。だが、いずれも執筆する時間がないままに金森は世を去った。本書の企画のために作られた「趣意書」によれば、金森は序論のなかで本書のスタンスを説明する予定であった。それがもし書かれていたらどのような文章となったのかは、今となっては誰にも知り得ない。だが、勁草・科学思想史シリーズの最初の巻にあたる『科学思想史』の第一章「科学思想史」の哲

学」のなかで、金森は次のように述べている。

〈科学思想史〉の本当の研究対象は、自然というよりは（自然についての知識のあり方）、またはその（作られた方）である。〈科学思想史〉は、自然界の条理を探ろうとする人間の精神のあり方、つまり観察、概念構築、理論構成などを可能な限り緻密かつ複層的に捉えようとする。それは、こと概念世界に関する限り、最初から無関係なものとして排除する要素を最小限に留めようとする。何が関係しているのか、あるいは何が関係していないのが、そう簡単には分からないからだ。その意味ではそれは文化的存在としての人間を、その全体性において把握しようとする。それは、一種の哲学なのである。／しかもそれは単に後から見て正しいことが分かった理論群などを自然の厚みの中から拾うことに専念するのではない。「……」或る時点でそのように考えられたということ、人間史の一つの〈事実〉としてみるということだ。それが正しいか正しくないかに関係なく、或る一定の緊張感と理をもって考えられたものは、人間史の一種の〈事実〉である。だから、「何かを考えるなどということとは別に大したことではなく、その考えたことが実在の構成原理を掴むか掴まないかということが大切なのだ」とする考え方を、科学思想史は採用しない。真理、半・真理、反・真理の混乱した海の中に溺れそうになっても別に構わない。なぜならそれらは、人間によって考えられたことなのであり、それは、〈世界の条理〉と同じくらいに貴重なものだからだ。このようなスタンスをとることで、科学思想史は一種の文化史としての自己定位をするのである。（二六―三七頁、強調原文）

この〈科学思想史〉観は、その後の勁草・科学思想史シリーズの企画・編纂に際しても一貫して金森のなかにあった基調であるように思う。金森は本書のための「趣意書」のなかで、このシリーズが日本篇で三部作、西欧篇『科学

『思想史』と合わせて四部作をなすものとしている。したがって、シリーズ最終巻の本書の基本的スタンスも、文化の歴史をできるかぎり幅広く見渡し、そのなかに科学思想の歴史を位置づけるというもので、「趣意書」に書かれた金森の言い方を引用するなら「科学思想史は科学文化史でもあるという暗黙の前提を著者たちは共有している」ということになる。そして、このことは、本書が過度に専門的な記述となつて科学思想史研究者にしか理解できないような論集となることを避け、「一般知識人が他の文化的文脈と関係づけながら通読しても面白いリーディングなもの」（同「趣意書」）となることを金森が望んだこととも関係する。むしろ、学問的な精確性や実証性を軽んずるといふ意味ではいささかもないが、こと本書について言えば、日本が科学思想を含む西欧の思想文化に出会い、その出会いが遭遇、対峙、咀嚼、展開といったさまざまな様相をとる（明治）という時代を考えようとする多くの読者に届き、読者を触発し、あるいは読者からの真摯な批判を得ることができるとすれば、このようなコンセプトのもとで書かれたもの以外ではありえないだろうという判断が金森にはあったはずだ。本書の著者たちは、こうした基本姿勢を共有し、原稿を準備した。このことは、さきに述べた原稿の相互検討のための研究会を開催した際にも確認された。

幻の論攷

最後に、本書に金森が執筆しようとした文章について一言しておきたい。先述のとおり、金森は序論とあとがきに加えて、これまでの金森の編著論集がすべてそうであったように、金森自身も一つの章を執筆する予定であり、それは「疾病の統治——明治の〈生政治〉」という仮のタイトルで構想されていた。金森が著書『〈生政治〉の哲学』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）で独自の吟味を加えた〈生政治〉概念を背景として、明治期の健康政策を見ようとするもので、具体的な疾患としてはコレラと脚気が想定されていた。それらの病気についての明治政府の対応や、当時の社会で議論されたことの言説分析を行ない、公衆衛生学という学問に伏在する統治思想を解明しようとするものであ

ったことが「趣意書」のなかで示されている。かねてより後藤新平（二八五七「安政四」―一九二九「昭和四」年）に対する興味を語っていた金森らしい構想で、ミシエル・フーコー（Michel Foucault, 1926-84）の〈生政治〉概念に精通していた金森の目に、明治の権力や統治はどのように見えたのだろうか。今となっては知る術がない。結局、この論攷は完成を見ず、本書は金森の編著のなかでただ一冊、金森自身が分担する章のない構成となった。